

みんなの水泳……日々徒然

**アジアユースパラ大会、
日本身体障がい者水泳選手権大会
などで…感じた
～2020東京に向けて…徒然～**

はじめに

前回は、8月に、ある合宿に参加したときに見た片麻痺の選手3名について、練習を見ながら感じたことを徒然なるままにお伝えしました。

今回は、9月に神戸で開催された日本身体障がい者水泳選手権大会や10月にマレーシアで開催されたアジアユースパラ競技大会マレーシア2013で感じたことをお伝えしたいと思います。



アジアユースパラ競技大会の会場となったのは、以前にもこのコーナーでご紹介したところのある屋根付き屋外プール

2020東京パラに向けて…

今、世間は2020年東京オリンピック・パラリンピックの話題でもちきり…の印象を受けますが…、9月と10月、国内と海外と、大会の現場にいて、「2020東京に向けて」どんなことが必要なのかについて、考えさせられることがいくつかありました。

入退水とその介助について

入退水とその介助は、障がいのある人の水泳において、特徴的な要素のひとつです。

障がいによっては、水泳を始めたばかりのときや、水泳を続けるにおいて永続的に入退水に介助が必要な場合があります。

競技会においては、初心者向けのものや小規模な記録会などでは、プールのスロープやサイド側から入水することや介助者が水着を着て一緒に入水して介助を行うようなことがあると思います。

しかし、国内の最高峰大会であるジャパンパラ大会や日本身体障がい者水泳選手権大会、ほぼすべての国際大会など、競技レベルの高い大会では、入水時および退水時は、介助者は水中には入らない状態で介助することが基本となります。

また、国内の大会では、ジャパンパラ大会や日本身体障がい者水泳選手権大会でも、大会運営側が介助ボランティアを用意

していますが、国際大会では、このような介助のためのボランティア配置はありません。参加チームのスタッフが介助を行うこととされています。

介助ボランティアがいることで、安心して泳ぐことができる選手や場面があるでしょうから、決して不必要とすることではないと思いますが、「2020東京」に向けて、「国内の大会特有の事柄がある」と、「どういった事柄がそうなのか」ということを、今後しっかりと把握していくことは指導者として大切なことだと思います。



右側の選手はS2クラスの選手ですが、2名での介助が適切な選手です。隣の選手は介助なしで自分で入水します。国際大会では、この左側の選手のように介助なしで入水できる選手は、自分のコースのスタート台横から入水することがほとんどです。1名での介助で入水する選手でも、自分のコースのスタート台横から入水することは珍しくありません。

選手がプールサイドで使用するための車いすの貸出しも国際大会では見たことがありません。義足の選手はレース直前に義足を外し、レースが終わるとプールサイドに上がり、さっと義足を着ける、といった光景がよく見られます。

入水においても、選手紹介のあと、(自分のコースのスタート台横からではなく)プールのサイド側から入る選手もいますが、国際大会ではS3クラスでもサイド側から入る人は少ないのが現状です。自分のコースのスタート台横から入水の方がストレスが少ないということでしょうか(もちろん、S1やS2などクラスや障がいによっては、サイド側から入るのが適切な場合もあります)。

指導者としては、競技会に出場する選手の指導に置いて、「泳ぐ部分以外の諸々」もひとつずつ練習を積み、身につけていくことを意識しましょう。

入退水の介助については、この夏はいろいろなことを考えさせられました。国内の大会でよく見かける「レースを終えて、プールサイドに上がろうとする選手ひとりに、何人ものボランティアが集まっているような介助の光景」について…この光景…みなさんはどうしているのかな、一般の観客にはどう見えるのかな…?と。

ひとりの選手に1名の介助者でいいとき、2名の介助者が必要なとき、いろいろな場合がありますが、必要な介助者以外は、下がって待機し、「手伝いが必要ならいつでも」という気持ちだけスタンバイ…という状態を運営側も意識して作り出せたらと思います。

「2020東京」に向けて、選手、指導者、大会運営関係者のみんなが、着実にステップアップしていきたいことのひとつではないかと思っています。

今回は、ルールエクセプションと競泳競技規則、スタートの種類などについて説明したいと思います。

ちゃんとルールを知っておこう!



アジアユースパラ競技大会と一緒にクラス分けを担当した、世界各国からのクラスファイアーのみなさん(右から2番目が筆者)

10月のアジアユースパラ競技大会で感じたのは、「指導者は、2020東京パラに向けて、ルールについて、今一度しっかりと整理しておくことが大切だ!」ということでした。

特に、国際大会では、競泳競技規則、審判の裁定に不服のある時の抗議の手順、クラス分けや個々の選手に付与されるルールエクセプションコードなど、「招集に行ってレースを泳ぐこと」以外の周辺ルールについて十分に確認しておくことが肝要です。クラス分け、競技での抗議の手順なども、国内の大会と国際大会とでは手順が異なります。また時代とともにルールも変遷していきます。常に国際の動向をキャッチする姿勢が非常に大切です。今はHPなどで随分いろいろと情報が掲載されており、様々な情報が入手可能です。

10月のアジアユースパラ競技大会に、私はチーフクラスファイアーとして参加しました。クラス分けは4日間行われ、その後3日間の競技会、という日程でした。各選手団から必要な選手がクラス分けを受検しましたが、クラス分け期間には1日ごとにその日のクラス分け結果が掲示されます。競技会期間も同様にその日の競技観察を終

えたクラス分け結果が掲示されます。

クラスの判定に不服があり、抗議するには、クラス分け期間であれば、「所定の書面に適切な理由を含んだ必要事項を英語で記載して、150ユーロを添えて、掲示された時刻から1時間以内に提出」する必要があります。競技会期間であれば、セッション終了後15分以内にチーフクラスファイアーが競技観察後のクラス分け結果を掲示します(この「チーフクラスファイアーが15分以内に掲示する」というのもルールのひとつです)。

抗議するには、「所定の書面に適切な理由を含んだ必要事項を英語で記載して、150ユーロを添えて、掲示時刻から15分以内に提出」する必要があります。

今回の大会で私の認識している範囲では、クラス分け期間および競技会期間に私がセッション後に掲示を壁に貼り付けるときに待っていたのは7日間のうち1回だけ、1国のみでした(ちなみに日本ではありませんでした…残念ながら…)。抗議が提出できる制限の1時間以内または15分以内に見に来ていない国がほとんど…というのがアジアの現状です。

例えば競技会期間は、「競技観察後にクラスが変更されていることもある」ので、クラス分け期間の判定クラスに不服がなくとも、必ず確認しておくことが非常に重要なことです。ロンドンパラリンピックではいくつかの国が掲示貼り出しを待っていることもありましたが、私がちゃんと時間内に掲示しているか、記載されている時刻が正しいかを腕時計で確認しているような国もありました(笑)。

今回のマレーシアでは、プリンターが故障がち、コピー機もつまりがち…で、15分以内に掲示できず、数分遅れで掲示したこともありましたが、こういう場合には、チーフクラスファイアーが「プリンターの故障により遅延。○×時○×分掲示」と記載して掲示すれば、それが公式となります。抗議はその時刻から15分以内なら受けられる、ということになります。

こういった周辺ルールをきちんと整理しておき、いざという時に備えて準備しておくことが国際大会では選手団スタッフとして大切なことです。

いざ抗議する、というときも、掲示から1時間とか15分の制限時間内に抗議の文書を作成するのは簡単なことではありません(レースでの失格に対する抗議はレース成立から30分以内です)。

英語で、しかも「適切な理由」を記載する必要があります。クラス分けにおいても、場合によっては規則の番号なども記載して具体的にどの規則のどこにどうだ、ということにも触れる必要が出てきます。英語、クラス分け、選手の障がいについて十分に理解していても「時間との闘い」です。

簡単なことではありませんが、選手を守るには、必要なこと、選手団の重要な役割なのです。その役割を果たすための知識の習得とスキル向上は「2020東京」に向けて日本の大きな課題だと、今回のマレーシアで再認識させられました。



2020年も選手たちのこんな笑顔を見たいものです

英語…頭が痛いなあ…

IPC Swimmingの公用語は英語です。ルールにそう記載されています。残念ながら、国際大会で日本語が公用語になることは期待できません。仕方ないことと言えばそれまで、ですが、「2020東京」に向けて、日本の大きな課題のひとつです。

例えば、クラス分けも英語で行います。英語の話せるスタッフを用意するのは選手団の義務とされています。英語の話せるスタッフまたは通訳を連れてこない場合にはクラス分けを受検することすらできない場

合もあります。クラス分けテストの最中でも、障がいや医学的な情報について、例えば手術の内容などを説明できなければなりません。医学的な情報についてすべてをきちんと説明できない場合には、クラス分けがストップされる可能性もあります。

規則などの和訳をいくら読み込んでいても、実際のコミュニケーション場面では、その英単語が出てこないと言いたいことは伝わりません。また、一般には英語が堪能な方に通訳をお願いしても、ある程度事前にくみなどの内容とその英語を理解して

おかないと、言いたいことがずれる可能性もあります。パラリンピックの水泳において、クラス分けってなんだ? ルールエクセプションってなんだ? ということを理解していないと、英語でclassification, rule exceptionと書いてあるだけではよく理解できないでしょう。各選手の障がいや手術の有無などに加え、医学的な用語についても、事前によく調べておく必要があります。「2020東京」に向けて…頑張らねば…英語、です。